

秋季教室の思い出

東京工業大学名誉教授 松尾 陽太郎

私が関東支部に関わり始めたのは、昭和 61 年の秋だったと記憶しています。次期支部長に、当時の上司だった木村脩七先生（東京工業大学、以下所属は当時のまま）が内定した関係で、事務局見習いとして私も支部の定例会議に出席させられました。支部長は東芝セラミックスの長島秀夫氏で、恰幅の良い温厚な人柄そのままに、和気あいあいの会議運営をされて感心させられたものです（図参照）。定例会議が終了すると、決まって新大久保駅周辺に繰り出し、カラオケ大会で懇親を深めました。長島氏はシャンソンの名手で、酔いがまわるにつれて次々とシャンソンの名曲を披露され、我々若造との格の違いを思い知らされました。名誉のためにおことわりさせていただきますが、常連だった河本邦仁先生（東大）や山下仁大先生（都立大）は人ぞ知るカラオケの名手で、音痴の私は店の片隅で小さくなっていたものです。

木村支部長時代には、事務局として本格的に支部運営に携わりました。特に印象深かったのは、協会賞の支部推薦に関わる手続きでした。木村先生は、誰もが認める公平無私の方でしたが、支部推薦者を決める過程でも慎重そのもの。誰もが納得できるように十分時間をかけて議論し、候補者を絞り込んでいくプロセスは見事であり、大いに参考になりました。また、支部幹事会終了後は私を連れて喫茶店で一服してからお帰りになるので、この日だけは私も家に早く帰れるのが密かな楽しみでした。

その後、内野哲也氏（旭硝子）、木邑隆保先生（芝浦工大）、齊藤 享氏（小野田）、三田村 孝先生（埼玉大）と支部長が変わっても、居心地の良い関東支部に居座り続けていましたが、平成 9 年に年貢の納め時と考えて引退しました。

ここで、セラミックス基礎秋季教室の思い出話をしてしたいと思います。関東支部では長らく「セラミックス教室」と「セラミックス講習会」を開催してきましたが、平成に入ってからいわゆるセラミックスフィーバーが終焉したため、「教室」も「講習会」も参加者が激減し、担当者は客集めに苦勞するようになりました。そこで、齊藤 享支部長時代に、両者を一体化させて、新たにセラミックス基礎秋季教室を立ち上げ、資源と人材の集中化を図ることになりました。

栄えある「第 1 回セラミックス基礎秋季教室」は平成 7 年 9 月 9 日に、東工大百年記念館フェライト会議室にて開催されました。テーマは「真空技術」で、初代実行委員長は平井祥子先生（東工大）でした。開会あいさつ

は支部長の代理として小生が行いました。私の日記には、平成 22 年と同様、この日は猛暑だったと記録されています。参加者は 52 名でした。

この講演会で印象に残ったエピソードがあります。高名な高柳邦夫先生（東工大）の司会を仰せつかった私は、先生に、「なぜシリコン単結晶表面の 7×7 構造を発見できたのか、経緯を教えてください」と質問をしました。その答えは意外なものでした。「モーツアルトだったと思うが、天才は 99% の模倣と 1% のひらめきできている、と言っているが、研究でも同じことが言えると思う。研究ではまず模倣をすべきだ。模倣もできないようでは新しい発見は覚束ない。」もちろんこの言葉を文字通りに解釈するのは危険だと思います。彼が「模倣」と言ったのは、「模倣しながらも、その中に何かしらの新しい発見が必ず含まれるものだ。その新しい発見を手掛かりに突き進んでいけば、大きな発見につながる」という意味が隠されていると考えられます。完全な模倣からは何も生まれないのは明らかですから、この例のように、支部主催の講演会では、講師の先生方から多くのことを学ぶことができたのは幸せでした。

前身の「セラミックス教室」と「セラミックス講習会」はもちろん、「セラミックス基礎秋季教室」も実行委員会は少数精鋭(?)で、わずか数名で企画・運営していました。そのため、3、4 年で当番（実行委員長）が回ってくるので、次はどんな企画にしようかと、いつも頭を悩ませていましたが、「自分が聞きたい企画にすればよい」と気付いてからは、当番が楽しみになったことを覚えています。私にとって関東支部の思い出は、秋季教室そのものであったと言っても過言ではありません。

以来連綿として「セラミックス基礎秋季教室」が開催され続け、セラミックス科学の発展に寄与してきたことはご同慶の至りと思います。関東支部のますますのご発展を祈念いたします。

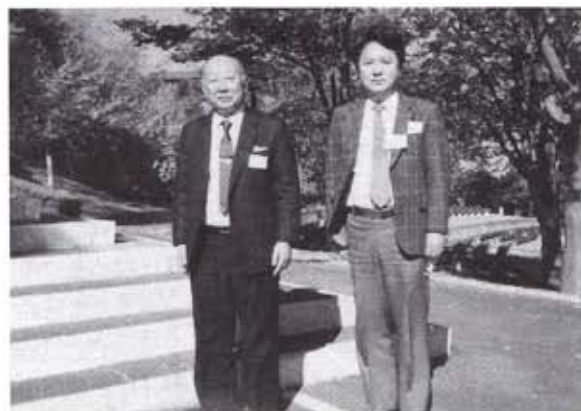


図 昭和 63 年度見学会にて（左：長島秀夫氏、右：小生）

（まつお ようたろう／東京工業大学）